旅の図書館オススメの一冊！

最近刊行された図書の中から当館のおすすめをご紹介します。

1 北欧のスマートシティ

安岡美佳 ユリアン森江原ニールセン 著　学芸出版社　2022年12月　287頁

スマートシティの実現には、「こうありたい」という人々の素直な思いが大切であり、それを実現するための具体的な取り組みを６つの視点から紹介する。サステイナブルを志向するスマートシティは市民・行政・企業の真摯な協業からスタートする。

2 太陽系トラベルブック

鈴木喜生 著　G.B.　2022年12月　159頁

宇宙への旅行はフィクションではなく、すでにはじまっている現実である。実際に利用できる宇宙旅行プランも多数紹介。宇宙旅行ガイダンスや旅の準備、訪問する天体情報など、実現し得る太陽系旅行として具体的に提案するガイドブック。

3 スイス観光業の近現代

森本慶太 著　関西大学出版部　2023年2月　183頁

1930年代以降のスイス観光業は富裕層戦略から、大衆化をはじめとする社会的・経済的変動への対応に迫られた。観光を科学的に体系化することで、観光の大衆化と客層の差別化を「スイス的解決」で実現したスイスの中に観光の近現代を学ぶ。

4 アイヌの時空を旅する

小坂洋右 著　藤原書店　2023年1月　347頁

クナシリ・メナシの戦いは「最後の決起だった」のか。230年前の出来事から現場で歴史を紡ぎだす。北海道の各地を訪ね、川をカヌーで、海をカヤックで、山岳を山スキーでたどり、アイヌ民族の世界観や自然観に迫ろうとしたルポタージュ。

5 万博学

万博学研究会 編　思文閣出版　2022年12月　191頁

「万博学」という研究視角の、さらなる共有と深化をはかる新たな挑戦が、いま始まる。創刊号では戦後の万博と植民地の関係を特集。万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

6 世界中から人が押し寄せる小さな村

島村菜津 著　光文社　2023年2月　292頁

ポストコロナ時代に求められる新しい観光とはなにか。
イタリアの小さな集落サント・ステファノ・ディ・セッサニオ村。古民家を活用する分散型の宿、アルベルゴ・ディフーゾの哲学と実践を国内の事例も含め紹介する。

7 大使が語るジョージア

ティムラズ・レジャバ, ダヴィド・ゴギナシュヴィリ 著　星海社　2023年1月　190頁

ジョージアという国はヨーロッパとアジアの境界にあり、文明の十字路として古来から豊かな文化と自然を育んできた。まだ日本で知られていない奥深い魅力を、在日ジョージア大使が案内する。

8 山村は災害をどう乗り越えてきたか

中央大学山村研究会 編 白水智 編集代表　小さ子社　2023年2月　386頁

現山梨県早川町、「早川入」と呼ばれた山間地域をフィールドとして、人々が暴風雨・日照り・地震など、災害といかに向き合ってきたか。山村の姿を検証する中で、明らかになってきたのは、驚くほどに強靭で野太い山村の生活のありようや資源の豊かさであった。

9 箱根の開発と渋沢栄一

武田尚子 著　吉川弘文館　2023年3月　355頁

日本有数の温泉地、箱根仙石原に焦点を当てて、明治初期に渋沢栄一、益田孝よって試みられた牧場経営から温泉地開発の行方、皇室財産と合本して展開した様相などについて、近代日本の財閥経済の背景や箱根独自の地域要因から開発の経緯を読み解く。

この一冊が面白い！

地域の見方・調べ方・考え方

國學院大學地域マネジメント研究センター 編　朝倉書店　2023年3月　147頁

2022年に開設された國學院大學観光まちづくり学部が、導入講義のために編纂したわかりやすい入門テキスト、「地域を見つめる」（調査）、「地域を動かす」（実践）の二部構成で、観光を主軸に置いたまちづくりは何を目指し、どのように進めるべきかを丁寧に説明する。

企画展示

企画展示 館内では、当財団の研究活動の紹介や、テーマごとに蔵書を紹介する企画展示を行っています。ご来館いただいた際に是非ご覧ください

ライブラリープラザ（1F）

地域の観光紹介　東京の島々　（2023年4月～6月）

東京には、伊豆諸島や父島・母島からなる小笠原諸島などがあります。
ゆっくり船旅を楽しむ小笠原の島々、あるいは高速船や航空機などで意外と手軽に訪れることができる島々も多く、都会では体験できない美しい海や豊かな自然を満喫することができます。
今回の展示は、これからベストシーズンを迎える東京の島々を中心にその魅力をお伝えするとともに、当館の蔵書から島に関連する歴史、文化、自然などをご紹介します。

ガーデンラウンジ（1F）

『るるぶ』特設コーナー　（2023年4月～9月）

『るるぶ』誕生50周年企画として、当図書館に所蔵する『るるぶ』を季節に応じて企画展示するとともに、国内・海外旅行の計画作りに活用していただくために、『るるぶ』をガーデンラウンジにラインアップします。『るるぶ』とともにその時代の旅を振り返るもよし、最新の情報、旅のテーマに即した情報からゆっくりと自分だけの旅の計画を立てるもよし、皆様のご来館をお待ちしております。

エントランスギャラリー（1F）

『るるぶ』誕生50周年記念 特別企画展示（2023年5月～9月）

今年で旅の情報誌『るるぶ』は誕生50周年を迎えます。次回の展示は「『るるぶ』誕生50周年記念特別企画展示」として、5月より展示をスタートします。ご期待ください。

貴重書ギャラリー（1F）

日本における「旅行案内」の経緯とは、旅行ガイドブックの歴史を当館所蔵の古書を含めて紐解き展示します。5月から展示の予定です。

Information

三康図書館のご紹介

三康図書館は、東京タワーのふもと、増上寺の裏手にある誰でも使える図書館です。西武鉄道と増上寺が運営に関わっています。1902年に開館し1953年に閉館した旧大橋図書館（私立図書館）の蔵書を継承して発足しました。旧大橋図書館は公共図書館の役割を果たし、子どもから大人まで様々な人々に利用されました。その蔵書は児童書や大衆雑誌、戦前の観光書や旅行書、江戸期の写本や巻物など分野は多岐にわたっています。資料の多くは書庫内にあるため、利用者は閲覧したい資料を受付にて記入していただきます。閲覧席の利用料は100円ですが、館内で行っている資料展示や書庫見学は無料です。看板リニューアルやメディアで取り上げられた効果もあり、2022年度は例年比約10倍の来館者の方が三康図書館を訪れ、賑わいを見せています。
120年前にタイムスリップできる書庫見学、資料展示を体験してみませんか。

所在地：東京都港区芝公園4-7-4明照会館1階
開館時間：9:30～17:00
休館日：土・日、祝祭日、夏季図書整理期間、年末年始

旅の図書館には、世界各地、全国各地のガイドブックを取り揃えています。
今号では、6月に50周年を迎える『るるぶ』を発行しているJTBパブリッシングにご寄稿いただきました。

公益財団法人日本交通公社
旅の図書館
LIBRARY OF TOURISM CULTURE
TEL 03-5770-8380　E-mail tabitosho_info@jtb.or.jp　URL https://www.jtb.or.jp/library
休館日 土曜日・日曜日・祝日、毎月第4水曜日、年末年始
※上記以外の臨時休館のお知らせはＨＰをご覧ください。

たびとしょ

— 旅の図書館 News Letter —

Vol.23
2023年4月号

写真提供：小笠原村観光局

「旅の図書館」TOPICS

当館の直近の様子をトピックスとしてお伝えします。

第17回自然公園研究会が開催されました

首記研究会が２月15日に当財団ライブラリーホールにて開催されました。今回は、「自然公園の保護と利用におけるガイドの役割を考える」をテーマに、奥日光小西ホテル コンシュルジュ・ネイチャーガイドの安倍輝行様、WakuWakuOFFICEあそBe隊 隊長の薄井良文様のご講演をはじめ、東京農業大学教授の町田先生にコーディネイトいただいたディスカッションなど盛況のうちに閉会いたしました。

自然公園研究会は、自然公園をはじめとする自然地域の管理や、望ましい利用の促進などについて、研究を推進し、知見を共有する、当財団が事務局を務める研究会で、2012年より継続的に開催してきました。

行政、公園管理者、研究者、学生、観光事業者など、誰でも参加可能なオープンな研究会として、様々な立場の人が、多様な視点から自然地域の望ましいあり方を考え、議論を行っています。

神奈川大学～観光文化コース 山口ゼミの皆さんが来館されました～

神奈川大学国際日本学部の山口ゼミの皆様が来館されました。初めてのご来館でしたが、山口先生からは非常に有意義な時間を過ごすことができたとのお言葉をいただきました。また参加された学生の皆様からは、

「私たちが求めている文献とほぼ確実に出会うことができる場所だと感じた」、「旅の図書館は観光に特化している本が多く、様々な文献を参照した中で、卒業論文で行いたい調査に特化した文献を見ることが出来た」、「旅の図書館にはとても多くの図書や資料があり、テーマにあった資料や情報を収集することができた。卒業論文で何を軸として書くか、それにはどのような統計、資料などが必要かといったことなどがおおむね把握できてよかった」というような感想をいただきました。旅の図書館は、観光を学ぶ学生の皆様に一人でも多くご利用いただき、お役に立てるよう情報の充実に引き続き取り組んでまいります。

神奈川大学国際日本学部　note：https://note.com/kanagawa_ccj

科研費報告会「インバウンドのこれまでとこれから ―戦前期日本の外客誘致から考える」を開催しました

首記報告会が２月21日に開催されました。明治後期から昭和初期にかけての外客誘致において重要な役割を担ってきた喜寅会、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、国際観光局を中心とした各組織の役割や、これまであまり知られていなかった取り組みの一部などを研究メンバー（山口誠（獨協大学外国語学部教授）、福永香織（（公財）日本交通公社主任研究員）、千住一（立教大学観光学部教授））から報告しました。その後、帝国ホテルの八島和彦氏(帝国ホテル東京副総支配人 兼 ホテル事業統括部長)にご登壇いただき、設立に関わった渋沢栄一の言葉や企業理念、帝国ホテルの今後等についてお話いただきました。また、日本郵船の遠藤あかね氏(日本郵船歴史博物館学芸員) より、同社が明治期から戦前期にかけて制作した出版物からみた船客誘致についてお話いただきました。最後に、過去の経験から学べること、現代のインバウンド政策を進めるにあたって再考したい点などについてディスカッションを行いました。

詳細は、「観光文化257号」（５月下旬発刊予定）でもご紹介します。

第13回「チーム新・湯治」セミナーが「温泉地から切り拓くサステナブルな地域の未来」をテーマに開催されました

温泉地はこれまで幾度とない社会変化に適応しながら、今日まで多くの人々に癒しを提供してきました。これからの未来を担う世代がこれまでと同様に温泉の恵みを享受し続けられるように、温泉地は、ビジョンを持ち、能動的に行動を起こすことが求められています。当日は３名の講師から温泉地の持続可能性について発表があった後、参加者を交えた意見交換が行われました。2023年度も「新・湯治コンテンツモデル調査」を皮切りに様々な取り組みが行われる予定ですので、「チーム新・湯治」へのご協力を宜しくお願いします。

上記研究会、報告会の内容については 当財団HP「活動報告」https://www.jtb.or.jp/activity-reports/kakenhi-seminar-2023/ 、セミナーに関しては https://www.jtb.or.jp/seminar-symposium/をご覧ください。

Presented by JTB Publishing

『るるぶ』誕生50周年記念 特別企画展示

2023年5月8日(月)～9月29日(金)

1F エントランスギャラリー／ガーデンラウンジ

世界・日本各地の「見る・食べる・遊ぶ」を発信し続けて半世紀、『るるぶ』は2023年６月で50周年を迎えます。その主力シリーズ「るるぶ情報版」は、国内155点、海外64点の計219点を発行する旅行ガイドブックです。日本全域、海外主要地域のほとんどをカバーし、JTBグループの強みを生かした旅のプロが選ぶ「本当におすすめできる情報」を読者に提供し続けています。発行元JTBパブリッシングのルーツとなったのがジャパン・ツーリスト・ビューロー。その成り立ちから現在までの歴史を追うことで、「るるぶ」につながる旅行ガイドブックの変遷がみえてきます。

JTBパブリッシングでは、旅の図書館にて、旅行ガイドブックの変遷とともに進化してきた『るるぶ』の50年の歴史を示す特別展示を実施します。パネルや図書、旅へと誘うテーマ別のコーナーなどをご用意し、みなさまをお待ちしております。

（JTBパブリッシング）

『るるぶ』につながる旅行ガイドブックの変遷

主な社会動向	年	主な出来事
●1912年 元号が明治から大正へ	1912年	**ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立** 外客に日本を知ってもらうことを目的とした「外客誘致論」に、鉄道院副総裁・平井晴二郎が共鳴。鉄道院の協力を得て、外客への日本の紹介・誘致・斡旋などの事業を行う機関として設立。この後、各国語による日本の案内誌や、日本人向けの旅行案内書、時刻表など、観光情報に関する様々な刊行物を世に送り出すこととなります。
●1914年 第一次世界大戦開戦（～1918年）	1913年	**和英文機関紙『ツーリスト』発行開始** 外客へ日本を紹介し、インバウンド観光の振興のために誕生した観光雑誌。創刊号表紙は富士山に桜草を配し、1000～1500部を広く国内外に配布。同じ年に英文日本案内『ジャパン』も発刊しました。
	1919年	**最初の邦文案内書『旅程と費用概算』発刊** 日本国内の旅行モデルルートと、その旅程にかかる費用の概算、目的地の紹介が日本語で記された旅行案内書。戦前の代表的な旅行案内書で、国内観光の発展に寄与したと考えられています。
●1923年 関東大震災	1924年	**雑誌『旅』創刊** 日本旅行文化協会の事業の一つとして、旅行雑誌「旅」を創刊。創刊号は菊判で定価40銭。2012年に休刊しましたが、日本で最も長く続いた旅行雑誌となりました。
●1926年 元号が昭和へ	1925年	**『汽車時間表』（後の『JTB時刻表』）創刊** 現在まで続く「JTB時刻表」の創刊号。鉄道院が業務用として発行していた「列車時刻表」を再編集し、一般向けとして販売したもの。創刊号は2022年9月にJTBパブリッシングから復刻版が発売されました。
●1941年 太平洋戦争始まる（～1945年）	1945年	**財団法人日本交通公社（JAPAN TRAVEL BUREAU）に改称** 度々の改称、長い戦争を経て、1945年9月に「財団法人日本交通公社（JAPAN TRAVEL BUREAU）」と改称。事業の目的を「国情文化の紹介、外客誘致を為す」とし、新たなスタートを切りました。
●1964年 東海道新幹線開業／東京オリンピック・パラリンピック開催	1963年	**株式会社日本交通公社の設立** 財団法人日本交通公社から、営業部門や出版部門を「株式会社日本交通公社」として分離し、民営化。

主な社会動向	年	主な出来事
●1970年 大阪で日本万国博覧会開催 ●1970年代半ば 女性のファッションと旅行が結びついた「アンノン族」が社会現象に。高山、萩、津和野などの「小京都」が人気観光地として脚光を浴びる ●1972年 札幌オリンピック開催／沖縄が日本に復帰 ●1973年 変動為替相場制へ ●1978年 成田空港開港	1973年	**『るるぶ』創刊** 女性の社会進出や週休２日制の浸透、国鉄の「ディスカバー・ジャパン（DISCOVER JAPAN）」キャンペーンなどにより旅行気運が高まる中、旅行雑誌『旅』の別冊として誕生。男性向けの『旅』とは異なり、行動的な若い女性をターゲットとし、旅をコンセプトにファッションや美容、料理なども盛り込みました。創刊号は当時としては斬新な「ひとり旅」がテーマ。
	1976年	**『るるぶ』隔月刊から月刊に** 『るるぶ』はすぐに季刊発行となり、２年目には隔月発行、1976年に月刊化。1997年10月まで続き、海外向けガイド「マイ・パスポート」や「るるぶグラフにっぽんの温泉」などの別冊も生まれました。
	1984年	**るるぶ情報版通巻1号『るるぶ京都』発行** 従来の旅行ガイドブックは有名観光物件の紹介のみでしたが、「食べる、買う、遊ぶ」など現地で使える周辺情報を載せ、写真や地図をふんだんに使用した旅行ガイドブックとして「るるぶ情報版」が生まれました。女性のバッグに収まるサイズとしてAB版を採用。
●1989年 昭和から平成へ	1987年	**初のるるぶ海外版『るるぶ香港マカオ広州桂林』発行** 1980年代は成田空港の開港や円高、国の「海外旅行倍増計画」（テンミリオン計画）によって海外旅行が急拡大しました。るるぶ情報版・初の海外版は当時人気の香港に。
●1998年 長野オリンピック・パラリンピック開催	2001年	**株式会社ジェイティービー（JTB Corp.）に改称**
●2002年 サッカー・ワールドカップ、日韓共催	2004年	**株式会社JTBパブリッシング設立** 株式会社ジェイティービー（JTB Corp.）から出版部門を分社化。
●2011年 東日本大震災	2010年	**るるぶ情報版がギネス世界記録™に認定** るるぶ情報版通巻4000号となる『るるぶ沖縄』発行、「発行点数世界最多の旅行ガイドシリーズ」（Longest book series-travel guides）としてギネス世界記録™に認定されました。1～4000号までのるるぶ情報版を縦に積み上げると、東京スカイツリーの約1.6本分に。
●2019年 平成から令和へ ●2020年 新型コロナウイルス感染症の世界的流行始まる ●2021年 東京2020オリンピック・パラリンピック開催	2022年	**るるぶ情報版通巻6000号『るるぶホノルル』発行** 1～6000号までのるるぶ情報版を縦に積み上げると、東京スカイツリー約2.4本分、累計総発行部数4億8500万部分のるるぶ情報版を横に並べると、地球約3周分になります。
	2023年	**『るるぶ』誕生50周年** コロナ禍においては旅行プラス「知る・つくる・学ぶ」という新機軸商品を生み出し、時代のニーズとともにWEBやリアル店舗といったメディアの形態を進化させながら、情報発信をしてまいりました。この先も『るるぶ』をよろしくお願いいたします。